

NPOからの協働事業提案（研究提案）プレ研究会議事概要
「いつでもだれでも学び再チャレンジ事業の研究」

日時 平成19年8月22日（火）14:00～15:00

場所 みえ県民交流センター控え室

出席者 玉村（チャレンジスクール三重）、山田（教育総務室）、中山（生涯学習室）、
服部（サポート委員）、古川、明石（NPO室）

概要

- ・ 短時間のプレゼンだったので、研究ベースに乗せていける部分が少ないと判断したが、重要なテーマであるので、研究が出来ればいいという思いで条件付採用とした。提案者の思いをあらためて聞かせて欲しい。
- ・ 5年間定時制高校に勤務した。若い人には中退や不登校といった事情のあることが多いが、地域性もあって一般の人が学ぶ機会が少なかったため、聴講生として、または、高校生として定時制高校に通う大人もいて、その環境がお互いにとってよかったと感じた。先生の手が届かないところに大人が対応してくれていた。
- ・ 現在いる子どもたちは大人しい不登校生が多い。22名いる。高校学齢が中心で通信に在学してうちに来ている。中学校に行っていない子どもが多い。
- ・ 門を広げて地域の人に入ってきてもらうことによって、大人に学習の場を提供すると共に、子どもたちも大人と学ぶメリットが受けられる。
- ・ 研究内容は、講座のスタイルや内容である。子どもたちの講座に生涯学習の場として大人に来てもらう。どういうテーマですればいいのか、どういう講座を持てばいいのか、また、広報面においてもチャンネルを持っていないので、行政と研究したいと思った。
- ・ 昨年度に高校教育室と一緒にやったが、高校学齢は義務教育ではないと言われた。今回の提案も生涯学習ではないのかもしれない。生涯学習室の業務を勘違いしているかもしれない。
- ・ 生涯学習室の業務は、生涯学習という名前が付いているが社会教育が中心となっている。社会教育は、学校教育を除いたもので、主に成人、高齢者が対象で、集団的な学習形態をとる。生涯学習は、学齢期を含めて、生まれてから死ぬまでの間、また一人で行う自主的な学習を含めて定義されている。教育委員会では、学校教育の部署は別にあるので、生涯学習室は、現状は主に社会教育を担当していることになる。
- ・ 学ぶ環境を整備するのも仕事で、例えば、博物館（美術館、図書館を含む）教育や青少年教育施設、放送大学などの環境整備も行っている。
- ・ 今回は、高齢者に主体的に学んでもらう環境を整えるという意味で、チャレンジスクールとの協働ということだが、高齢者が学ぶ場所は他にもあると思う。広報面については、生涯学習センターの人材バンクや講座登録制度を活用できると思う。
- ・ 何をヒントにして研究すればいいのかわからなかった。提案は現状で対応できる。

- ・ 生涯学習と不登校を分析した文献はあるか。
- ・ 事例はあるが、文献はないと思う。
- ・ 不登校の子どもの分析の文献はある。文部科学省も出している。コミュニケーションの問題を抱えている場合が多い。同年齢より異年齢の人の方が安心できる。
- ・ 生涯学習と不登校の研究となれば全国に事例はないのではないか。
- ・ 不登校の子どもにとって、先生やともに学ぶ者が高齢者であれば誰でもいいということはないのではないか。きちんと対応できないと高齢者の方も悩まれるだろう。そのような研究であるなら単純には紹介できない。
- ・ 適応指導教室にいたとき、外部の人と合う子と合わない子がいた。気持ちを大事にしてもらえる場所が必要である。そのような研究なら、生徒指導の方が相応しいのではないかと思う。提案の内容の話なら、既にチャンネルはあることになる。
- ・ 子どもたちが出て行くのは難しく、来てもらう人は選べないことになるので、合う、合わないは、ある。社会なのでトレーニングになる。
- ・ ケアする講座もやって一緒に勉強しようという人ならいいと思う。
- ・ 講座の講師の心構えは？
- ・ 講師に心構えを求めるものではない。
- ・ 研究成果のイメージはどんなものか？
- ・ 数値的な成果は難しい。目に見える成果も難しいが、子どもたちが、次のステップに進めることが成果になる。
- ・ 人材バンクは一般のNPOでも登録できるのか？
- ・ 生涯学習センターに問い合わせさせていただきたいが、できると思う。
- ・ 民間助成もあるので、研究成果が出れば全国発信できるのではないか。
- ・ 場所は増えて欲しいが、子どもたちを大事にしてあげたい。
- ・ 不登校の子どもが一定数いるので、早くコミュニケーション能力を取り戻して欲しいが、まだ、取り組みは少ない。
- ・ 高校適齢期の適応指導教室は、義務教育ではないので実現できなかった。学校に行けない子と生涯学習に意欲のある大人のどちらかというとな登校の子どもたちをなんとかしたいという思いが強い。
- ・ より広い視野で支援メンバーを見つけることが必要である。メンバー募集するなら、NPOの取り組みや特色を打ち出してPRすることが大事である。いろんな情報発信を活用してみてもどうか。
- ・ チャレンジスクールの講座は、高校のメニューということだが、生涯学習の他のニーズが出てくると不登校からずれてくるのではないかと思うが、生涯学習のニーズの情報提供はできる。
- ・ 講座をやっています。一緒に勉強しませんかと呼びかけて、関心のある人に来て欲しい。
- ・ 民間助成を活用すると取組が世間に知られていき、さらに広がることになる。

- ・ 文部科学省にも補助申請したがダメだった。公民館講座も一つでもうちでやれば良いと思う。
- ・ 協働研究というより、情報をもったりして現実的にやっていく。
- ・ 大事な取り組みなので頑張りたい。
- ・ 団塊の世代への声かけもしていきたい。市の支援センターから子どもたちが来ている。行政の手が回らないところでNPOの力を借りるということだが、うちを選択肢に選んでもらったのは、提案事業で活動を知ってもらったからだと思う。
- ・ 生涯学習センターの人材バンクや講座登録に関しては、すぐに情報提供する。
- ・ 文部科学省の来年度予算の情報が入ったら、NPO室に流すので、PRしてほしい。

■協議結果

- ・ 提案内容については、既存のチャンネルで対応できるので、生涯学習室から必要な情報は提供する。
- ・ 研究ということでの提案だったが、情報をもって現実的にやっていく。
- ・ 民間助成活用などによりさらに活動PRに取り組む。

■サポート委員コメント

今回提案された課題の重要性・先駆性を考慮し、協働研究提案の相互理解を深めることで、現場での実践をとおした研究ができないかと考え、再度のコミュニケーションの機会を設け、また提案の主旨・詳細についての確認も行った。

結果として、三者の相互理解は深まったが、汎用性を備えた研究という形に協働して結実させていくためには、全体として若干パワーが不足しているように思えた。まずは個別具体の課題の解決に注力したいという思いを強く感じたので、この件は協働研究までには至らなかった。